

[育林第一研究室]B. ヒノキ諸形質の変動量について

宮島, 寛
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

前田, 武彦

<https://doi.org/10.15017/1456293>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和42年度, pp. 46-46, 1968. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :



B ヒノキ諸形質の変動量について

宮 島 寛・前 田 武 彦

ヒノキ属には大別して、ヒノキ、サワラの2種類がある。その分類の根拠は初生葉の展開節数の相違にあるといわれる。したがって、その方法の基礎を分析し明確にするため、ヒノキ初生葉の展開節数が固定的なものであるかどうか、或いはいわゆる地方品種または個体によつて、その展開数に差があるかどうかを調査した。

材料として母樹別には 1) 高知県大正営林署管内産—1号、2) 熊本県出水営林署管内産—2号、3) 熊本県出水営林署管内産—3号、4) 熊本県出水営林署管内産—4号、5) 熊本県阿蘇郡高森町(ナンゴウヒ)。母樹別には 6) 神奈川県平塚営林署管内産、7) 長崎県長崎営林署管内産、8) 熊本県球磨郡多良木町上村、 9) 熊本県飽託郡河内芳野村の各地方より集められた種子を、1966年5月6日に九州大学農学部構内圃場(A播種床)および同大学付属粕屋演習林圃場(B播種床)の2カ所にそれぞれ播種し、同年9月15日、初生葉の展開が完全に終了した幼苗について、その展開節数を調べた。

播種床の土壌分析結果および照度、母樹別および母樹林別の検定等は省略するが、この調査の結果を簡単に述べると、播種床(A)および(B)において母樹別、母樹林別内での初生葉展開節数、また同一母樹からの播種床(A・B)の間にも有意差がみられた。

この考察の結果と柳田由蔵によるサワラの初生葉展開節数の観測から、ヒノキ、サワラの毛苗時代の識別は初生葉の展開節数を測定することによつて容易になされる。しかしヒノキの初生葉の展開節数は、播種床環境の諸条件の作用如何によつてその変動が可能であり、その諸条件のうち照度による影響が最大である。その照度条件の低いとき、平均展開節数は162、163、164において一節以上増加するが、大正署からの161およびナンゴウヒ(165)の節数増加は前者と比較して小さい。またこの傾向は母樹林別においても同様である。

このことは次のような結論に達する。播種床環境条件の差異によつて、初生葉展開節数の変化の割合が大きいものと比較的小さいものとに分別できる。ヒノキの稚苗は照度が低くなればそれに適応するため初生葉展開節数を増し、葉の面積を大きくする性質がうかがわれる。このように初生葉展開節数は、環境と照度によつて変化し、また標本にはバラツキがあるためヒノキの品種分類を行なう確実な根拠とはいえない。しかしその変化の程度を比較することによつて立地適応度の異なつた個体の選抜には幾分か貢献するものであろう。